季節外れの暑さを凌ぎながら、紅葉シーズンのおでかけ先を考えていた時、ふと目に留まったのは、令和6年NHK大河ドラマ「光る君へ」にまつわるニュース記事だった。63作目となる大河ドラマは、主演に吉高由里子を迎え、平安中期に活躍した紫式部の人生にスポットを当てた物語だという。千年の時を超えて愛される世界的ベストセラー『源氏物語』を書き上げた女性が主人公になるのか…。

PC プレス
2024 / Jan.
vol.033

Index

#001	京都・滋賀 受け継がれる文化と歴史にふれる	p.01
#002	[名橋をめぐって] 小田原ブルーウェイブリッジ 新余部橋りょう	p.9
#003	[こんなところにPCが！] 長崎県美術館 — 光の回廊 リブ付き PC 床版 —	p.14
#004	[明日を築くプロジェクトの風景] ライトライン開業	p.16
#005	[研究・教育の現場から] 九工大コン研 2023 ！ 九州工業大学大学院 工学研究院	p.20
#006	[特別企画] Vision2023 作成委員座談会	p.22
#007	仕事場拝見	p.28
#008	[よくわかる！PC 基礎講座] PCプレキャスト工法の活用	p.31
#009	PCニュース	p.32

今号の表紙 ／ 第一大戸川橋梁

昭和29年、大戸川に架けられた国鉄信楽線（現 信楽高原鐵道）の橋。国内初の本格的なポストテンション方式PC鉄道橋で、平成20年に登録有形文化財（建造物）に登録され、令和3年には国の重要文化財に指定された。

広報誌の名称について

Prestressed Concrete 情報誌 PCプレス は

コンクリート（C）にプレストレス（P）の力が
作用した様子を表現したもので、
「プレス」は定期刊行物を意味しております。

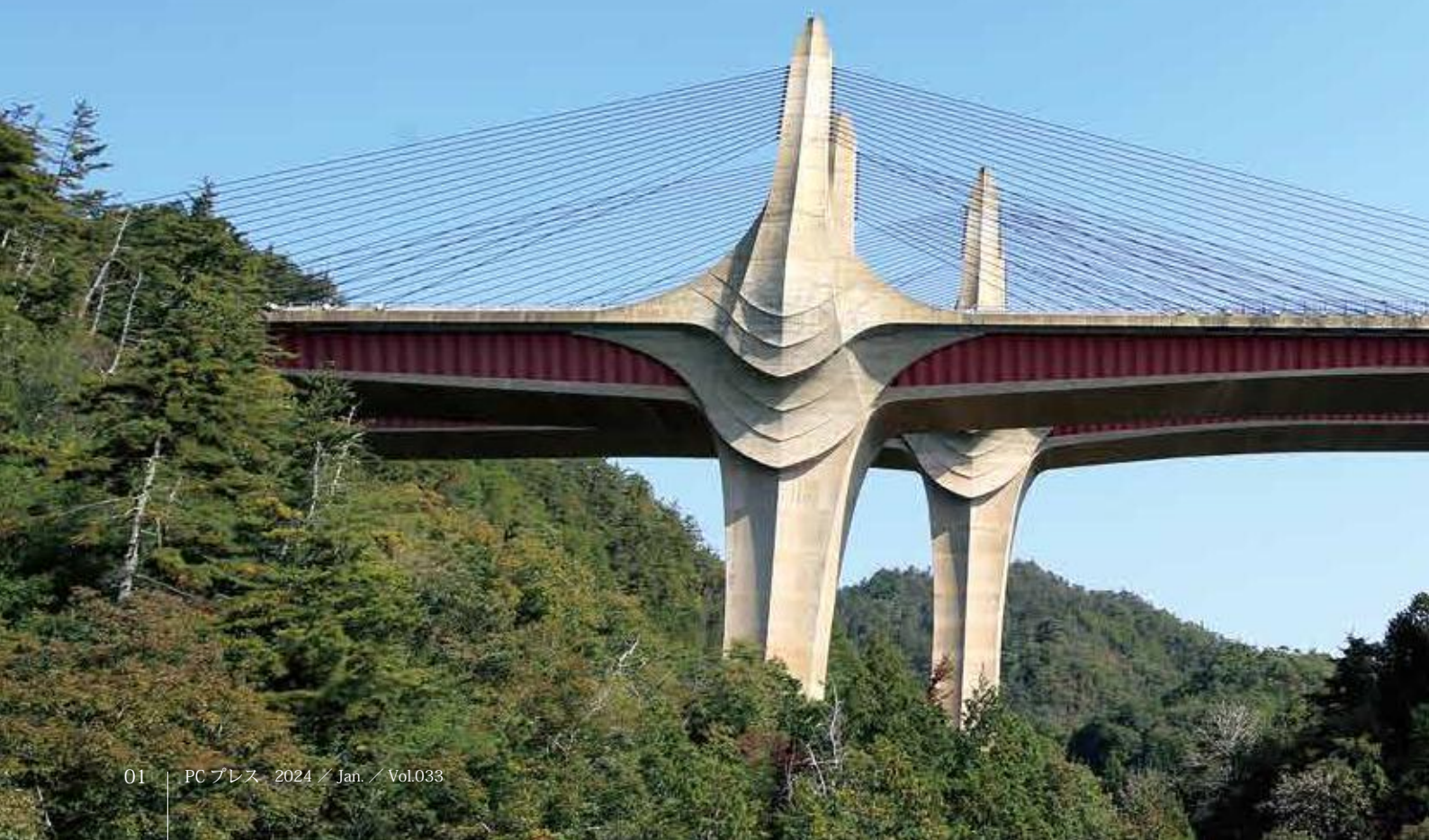
いづれの御時にか 女御
更衣あまた候ひ給ひける中に
いとやむごとなき際にはあらぬが
すぐれて時めき給ふありけり

高校の古典の教科書に掲載されていた『源氏物語』。訳も分からず冒頭を暗記させられたのは、私だけじゃないはず。キャラクターの見分けに高度なスキルを必要とする大和和紀の漫画『あさきゆめみし』を読んだのも遠い昔。美男子の光源氏がさまざまな女性たちと恋に落ちる、くらいの記憶しかない。よし、ここはひとつ、『源氏物語』の復習もかねて、作者である紫式部について知る旅なんてのはどうだろう。

彼女が生まれ育ったのは、平安京。つまりは、現在の京都。仕事をしていたのは、もちろん宮中だ。ということは、自ずと行き先は見えてくる。観光客で激混みする季節だけど、逆に言えば、やっぱり京都は秋がいいってこと！ 調べてみたら、紫式部ゆかりの地は京都だけじゃなく滋賀にも点在しているみたい。だったら足を延ばして、NHK朝の連続テレビ小説『スカーレット』の舞台になった信楽へも行ってみよう。連綿と今に受け継がれる文化と歴史にふれる旅のはじまりだ。

京都・滋賀

受け継がれる文化と歴史にふれる



旅のスタートは橋から！ 鴨川東岸線橋を走り抜ける

京都駅前でレンタカーを借りて、まずは宇治へ。日本三銘茶の産地として知られる宇治は、『源氏物語』ゆかりの地。全五十四帖の中で、宇治が舞台となった最後の十帖を『宇治十帖』といい、宇治には『源氏物語』の世界を感じられるスポットがいくつもあるという。

鴨川東岸線を南下する途中、九条通と交差する新しくて立派な橋を渡る。その名も、鴨川東岸線橋。この橋のおかげで渋滞しがちな師団街道を避けることができるため、地域住民が大変重宝しているらしい。交差する九条跨線橋は昭和12年に架設されたもの。昭和50年代半ばまで市電が走っていたので床版が厚く、構造的に丈夫な橋として作られたのだろうか、今なお現役なのも納得だ。古都のあちこちに歳月を重ねた価値あるものがあるんだろうな、と否応なしに期待が高まる。

▲ 鴨川東岸線橋
九条跨線橋につながるPC連続中空床版橋。橋梁上に交差点を造る特徴ある構造で、交差点部の最大幅員は35mに達する。橋の下の遊歩道は、愛犬の散歩やランニングに適した市民憩いのロードとして親しまれている。

「宇治十帖」の舞台 茶どころ・宇治を満喫

鴨川西ＩＣから第二京阪道路にのって宇治西ＩＣまで約10分。そこからさらに10分ほど進むと、宇治橋袂の紫式部像が出迎えてくれる。宇治川を横目に、目指すは天ヶ瀬ダム。その直下に架けられた優美な白い橋がお目当てだ。周囲の景観に溶け込んだ美しい佇まいは、「白虹橋（はっこうばし）」の名に相応しい。近くの駐車場に車を停めて、端から端までゆっくりと歩いてみる。近くでは朝からキャンプを楽しむ夫婦、川べりには釣りに興じる人の姿も。長閑な風景に癒される。

来た時とは違う対岸を走る細い道を車で進みながら宇治橋へと戻る。東詰辺りで小腹が空いてきた。ふらりと立ち寄ったのは、風情漂うお茶屋「通圓」。なんと創業１１６０（永暦元）年！え、それって平安時代ってこと??日本で一番古いお茶屋が何気なくそこにある…京都ってそういうところなんだ、と改めてしみじみしてしまう。

▲ 白虹橋
橋長77mの自碇式PC吊床版橋。プレキャスト部材が多用された吊床版と補剛桁の間は、耐候性鋼板の角鋼管でトラスが構成されている。吊床版のグラウンドアンカーは補鋼桁の完成後に切り離され、橋体が自碇式となったことで構造形式自体は外的静定な単純桁に。

▲ 抹茶ミニパフェと抹茶「豊昔」と茶だんごセット
併設の茶房では、宇治茶はもちろん甘味や茶そばがいただける。挽き立ての抹茶を贅沢に使用した抹茶スイーツが人気。

▼ 通圓 宇治本店
平安時代末期創業の日本で最も長い歴史を持つお茶屋。普段使いのお茶から高級茶や品種茶、有機栽培茶などが揃う。

そもそも宇治は平安時代、貴族たちの別業の地として愛されてきた土地だ。当時の貴族たちが一服の茶を求めて立ち寄ったかもしれない場所にいる、その喜びに震えた。調べてみると、「通圓」は狂言の演目『通圓』の舞台でもあるし、吉川英治著『宮本武蔵』にも登場する。いやはや、歴史が深すぎる。

抹茶尽くしのスイーツを堪能した後は、そのままぶらぶらと周辺を散歩。中州に架かる朱色の橋が気になって行ってみれば、「朝霧橋」という雅な名が。名前だけでなく、橋から見える景色もまた風雅。画になるとはまさにこういうことだ、と写真を撮りまくる。

新旧の橋に満足したところで、いよいよ本格的に『源氏物語』について学ぼう。やって来たのは、日本唯一の『源氏物語』をテーマにしたミュージアム。ここは建物の屋根にPC構造が採用されているのも見どころだ。自然に囲まれたエントランスを行ったり来たり。いろんな角度から流線型の屋根をじっくり眺めて、いざ館内へ。

展示ゾーンへ足を踏み入れると、一気に王朝時代へタイムスリップしたような感覚に襲われた。蔀戸（しとみど）を模した装飾や復元された原寸大の牛車、明りの効果によって相手の姿をそっと見る「垣間見」を体験できるコーナーなど、まるで物語の中に入り込んだみたい。映像展示室ではオリジナルアニメも上映されていて、時間がいくらあっても足りないくらいだ。とくに気になったのは、平安京と光源氏をテーマとする「平安の間」と、宇治十帖がテーマの「宇治の間」をつなぐ「架け橋」ゾーン。橋を模した通路の両壁には、当時の道行きの困難さが描かれていて、高速道路でビュンとやって来た私は、インフラの有難さを痛感したのだった。

紫式部が暮らしたと伝わる 廬山寺から雲林院へ

この後は物語ではなく、作者・紫式部がどんな人だったのかを知るスポットをめぐりたい。そこで、彼女の生家として有名な廬山寺に向かって北上する。途中、「京の七口」のひとつである荒神口に架かる荒神橋を渡って、当時の人々と同じように入洛することにした。

▲ **朝霧橋**
宇治川に架かる朱色の橋。橋の北側には、『源氏物語』宇治十帖から、匂宮と浮舟が小舟で宇治川へと漕ぎ出す場面をモチーフにしたモニュメントも。

▲ **宇治市源氏物語ミュージアム**
開館から25年目を迎えた、『源氏物語』初心者でも楽しみながら学べる体験型ミュージアム。寝殿造を模した優雅な曲線が美しい屋根にPC構造が採用されている。平成30年のリニューアル以来、リピーターも多い。

▲ **平安の間**
『源氏物語』のあらすじや魅力を紹介するハイビジョン映像「源氏物語と王朝絵巻」など、物語の世界を知る入口となる空間。

盧山寺は、紫式部が夫・藤原宣孝と結婚生活を送り、一人娘の賢子（かたこ）を育て、『源氏物語』を執筆した邸宅だという。濡れ縁に座して竜胆（りんどう）が咲く源氏庭をぼんやりと眺めるだけでも、なんだか不思議と心が落ち着く。

次は、『源氏物語』第十帖「賢木」にも登場する雲林院。途中、紫式部の墓所に立ち寄って、すてきな物語を書き残してくれたお礼を伝え、この旅の安全を祈願する。雲林院がある紫野は、紫式部が生まれ育った地。諸説あるが、紫式部という名前もそれに由来するようだ。千年以上も昔に生きた人たちが生活していた場所が当時の面影を残したまま存在しているって、本当にすごいことだ！

美しいコンクリートが映える圧巻の稲盛記念会館

源氏物語に親しむ一日を過ごしてきたけれど、やっぱり最後はプレストレストコンクリートの素晴らしさを間近で体感したい！ということで、訪れたのは稲盛記念会館。言わずと知れた、京セラ

▲ **盧山寺 源氏庭**
紫式部が『源氏物語』や『紫式部日記』を執筆した地として知られる寺。平安時代の貴族邸を模した白砂と苔の庭には、紫式部邸宅跡の顕彰碑が建つ。

▲ **雲林院**
大徳寺の塔頭で、紫式部が晩年を過ごしたと伝わる。平成12年の発掘調査で、平安時代の園池や建物跡、井戸跡などが発見された。

▼ **稲盛記念会館**
京都三大学（工繊大、府立大、府立医科大）の教養教育共同化施設。プレキャスト部材が表に出るように使われている珍しいデザインが見どころ。平成26年竣工。JIA建築環境賞、プレストレストコンクリート工学会賞、日本建築学会作品選集、日本建築家協会優秀建築選受賞。

▼ 近江大橋
大津市と草津市を結ぶ、全長1290mの琵琶湖に架かる道路橋。「湖南横断橋」とも呼ばれ、国道1号のバイパスとしての機能をもつ。船の航路にあたる部分のみがややせり上がっている。近江大橋有料道路の一部として建設されたが、平成25年に無料開放された。

株式会社の創業者・稲盛和夫氏に由縁ある建物だ。大学施設なので関係者以外立ち入り禁止だが、外から見る分には問題ない。何がすごいって、この建物はPC部材を柱状にデザインとして表に配している点。近づいてよくよく目を凝らしてみると…木の型枠で造った現場施工の部材と金属の型枠で仕上げた工場製のPC部材のクオリティの違いがはっきりと判る。こんな貴重な建物、なかなかない。柱の下に立って角を見上げてみる。表面の美しさが明白で職人さんの技術に感嘆するばかりだ。

存分に堪能したところで、今宵の宿となる大津へと移動する。道すがら、国道1号沿いに立つ記念碑を横目で眺める。百人一首にも詠まれる「逢坂の関」があった場所で、交通の要衝だった逢坂山も『源氏物語』に出てくるスポットとして知られる。京都から滋賀へ――旅も折り返しだ。

▲ 瀬田の唐橋
瀬田川に架かる橋で、近江八景のひとつ「瀬田の夕照（勢田夕照）」として知られる。日本三名橋のひとつ。

満月の夜には筆が進む？『源氏物語』の着想を得た寺

昨日に続き、2日目も朝から快晴。ドライブ日和だ。ホテルを出発して、無料化でより便利になった近江大橋を利用して石山寺へ。道中、瀬田の唐橋を見物するのを忘れてはいけない。橋好きとしてはスルーできない日本三名橋のひとつで、壬申の乱や源平合戦、承久の乱など多くの戦乱の舞台となったことでも知られる。急いでいる時ほど危険な近道を選ばず、安全な遠回りをする方がいいという意味の諺「急がば回れ」の由来となったことでも有名だ。

そこから2分ほどで石山寺に到着した。『枕草子』『蜻蛉日記』『更級日記』などの文学作品に登場し、平安王朝文学開花の地としても知られる石山寺は、紫式部が『源氏物語』の着想を得た寺といわれている。都からそう遠くはなく、琵琶湖の風景を愉しみながら参詣できる石山寺詣は、当時、観光的要素を含めて貴族女性たちの娯楽のひとつだったそう。なるほど、いつの世も旅は私たちをリフレッシュさせてくれるということか。

古くから紅葉の名所としても親しまれてきた石山寺。滋賀県最古の木造建築である本堂をはじめ歴史的建築物が多くある。仁王像が配置された鎌倉時代建立の東大門をくぐり、紅葉のトンネルと化した参道を進む。70段ほどの大坂（おおざか）から本堂へ向かってもよし、その奥にある本堂の下を通る緩やかな階段を上がってもよし。

▼ 石山寺（大門）
国宝の本堂および多宝塔をはじめとする多くの文化財を有し、広大な境内には寺名の由来となった天然記念物の硅灰石がそびえ立つ。

▲ **源氏の間（本堂）**
重要文化財『石山寺縁起絵巻』にも描かれている本堂にある部屋。紫式部が『源氏物語』の構想を練るため参籠したことで知られる。

この時季は、閼伽井屋（あかいや）の池の水面に映る「さかさもみじ」と寺名の由来となった巨石の鑑賞がお勧め。さらに階段を上って本堂へ。本堂にある「源氏の間」は、1004（寛弘元）年8月十五夜、前方にそびえる金勝山から昇る中秋の名月が湖面に映える景色に心を打たれ、「須磨」「明石」の巻を想起したと伝わる場所。美しい自然の風景からインスピレーションを受けたと聞けば、後の世で映像化される有名作家にも親しみを感じてしまう。

山間に突如として現れる近代的意匠の近江大鳥橋

京滋を旅の目的地に決めてから、何よりも見たい！と願っていたのは、平成20年に新名神高速道路亀山JCT～草津田上ICの開通に伴って供用された近江大鳥橋だった。そのため、信楽への往路はあえて高速に乗らずに下道で（もちろん帰りは高速を走りながら眺めるつもり）。近江大鳥橋を見上げる絶好のポイントだと目星をつけていた大鳥居橋手前で車を降りる。

なんというか…まるでエヴァンゲリオンに出てくる使徒みたいだ。独創的なフォルムに、目が釘づけになる。デザインを担当したのは、アメリカ人の景観デザイナーと滋賀県立信楽高等学校の生徒だという。二羽の鶴が背中合わせで天に向かって飛翔する姿をモチーフとした主塔の意匠と付近の地名「大鳥居」を掛け合わせて、「近江大鳥橋」と名づけられた。

上下線ともに西側（大津JCT側）2径間がエクストラドーズド形式になっていて、他の部分はPC箱桁橋もしくはPCラーメン橋の構造だ。これは、西側橋台と主塔位置までの斜面が急峻なことに加えて、環境省のレッドデータブックに記載されている絶滅危惧種のイシモチソウやオオヒキヨモギ、準絶滅危惧のヒメコヌカグサなどの希少植物保護の観点から橋脚位置が制限され、約150mの側径間長を有する支間割となった。県立自然公園内に位置し、周辺環境との融合を図るため、その形状だけでなく、周囲の風化花崗岩の色調に見合う薄茶系の着色コンクリートが採用されている点も興味深い。人々の生活に寄り添う橋だからこそ、利便性＋αが求められるのはもっともなことだろう。

令和でも現役バリバリ！伝説の第一大戸川（だいどがわ）橋梁

この旅最大の目的を果たし、信楽ICを目的地に気分よく車を走らせる。次に見ておきたいのは、遺跡発掘によって工法を変更したという鍛冶屋敷橋。隼人川みずべ公園の中に架かる橋で、国史跡の紫香楽宮跡を跨ぐように設計されている。史跡の名にちなみ、「紫の香り楽しめる場所」になるようにと、地域の人たちがラベンダー畑の育成に取り組んでいて、鍛冶屋敷橋のすぐ傍の畑でもラベン

▲ **釜炊近江米 銀俵**
特製羽釜炊きごはんが主役の多彩な定食を目当てに、遠方からでも多くの人が訪れる。平日でも行列必至の人気店。

▼ **近江大鳥橋**
新名神高速道路大津JCTと信楽ICの中間付近に位置する橋梁。波形鋼板ウェブを用いたエクストラドーズド橋で、橋長555m（下り線）と495m（上り線）の2橋梁から成る。平成18年度土木学会田中賞（作品部門）受賞。

▲ 鍛冶屋敷橋
PRC５径間連続ラーメン版桁橋。写真左から順に、鍛冶屋敷遺跡・甲賀市道・隼人川みずべ公園・隼人川を跨ぐ構造になっている。

ダーが風に揺れていた。

さて、そろそろ昼時だ。立ち寄ったのは「釜炊近江米 銀俵」。特製羽釜で炊いたごはんが自慢の店だ。真の主役ともいえるごはんは、信楽の山水（硬水）で育った地元産コシヒカリ。メインは、近江米粉の唐揚げ、縞ほっけ、チキンカツなどから選べる。定食といえば鮭！という刷り込みのもと、銀鮭の糀漬けを頼んだ。自家製米麹に漬けて旨味と甘味が引き出された鮭は、ごはんとの相性も抜群。漬物やとろろもごはんのおともとして申し分ない。ごはんおかわり自由の誘惑に勝てず、ついしっかり2杯も食べてしまった。

次に訪れたのは、名前だけはよく耳にしていたけれど、これまで行く機会がなかった第一大戸川橋梁。信楽高原鐵道玉桂寺駅近くに架かる短い橋だ。フランス人のフレシネーによってPC技術が実用化され、1946年に世界で初めてのPC橋、ルザンシー橋が完成した。そのわずか8年後に、フランスから遠く離れた日本でスパン30mのPC鉄道橋が架けられた。当時の国鉄鉄道技術研究所を中心にさまざまな実験研究が重ねられ、多くの知見を得て完成にこぎつけたという。こうした地道な研究がその後のPC橋の発展に大きく寄与したのだろう。これは見逃せない！

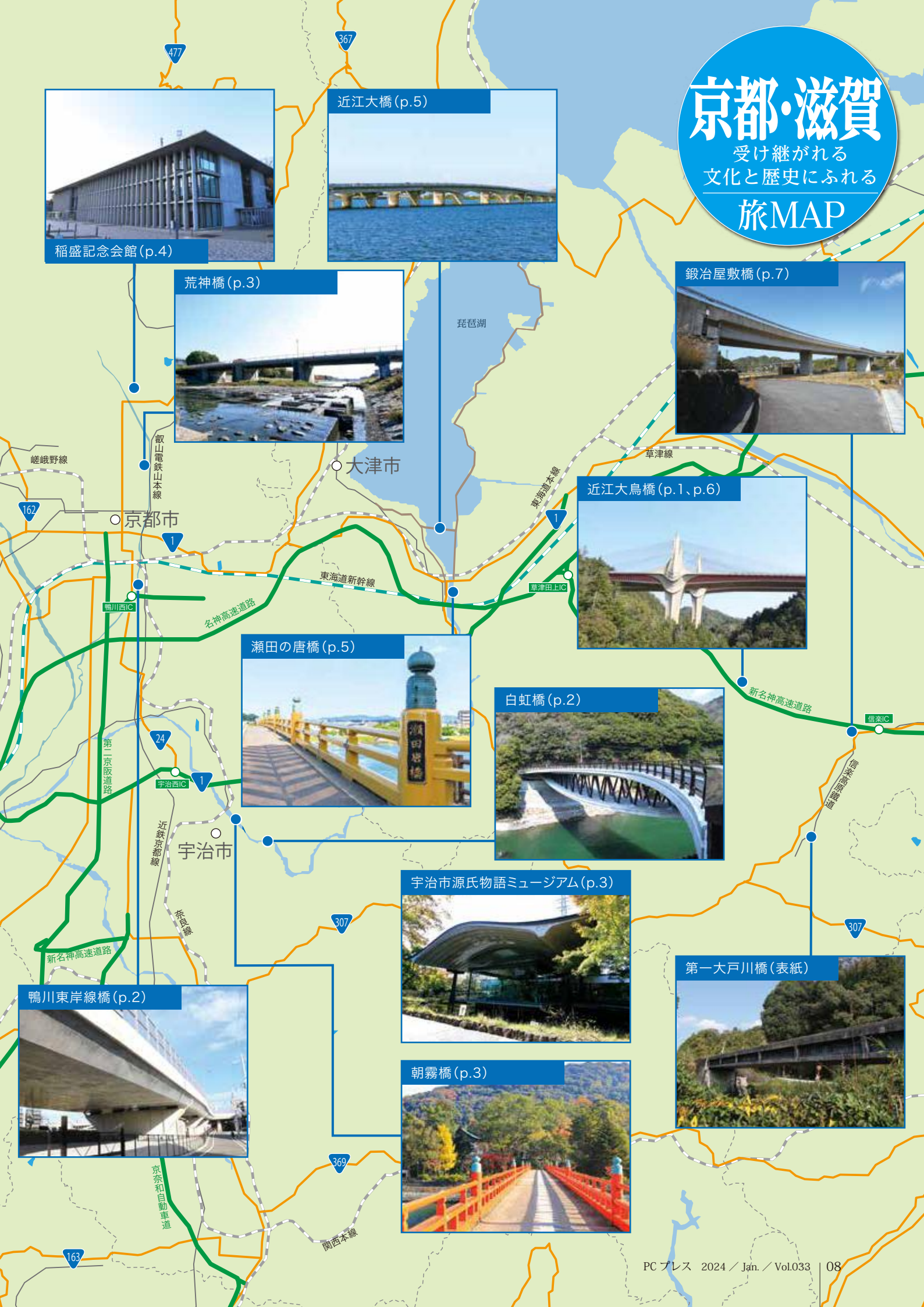
陶芸の村・信楽で やきものの魅力を体感する

ようやく信楽の中心部に入った。信楽といえば信楽焼と狸。ならばと、市街地を見下ろす丘陵に立つ「陶芸の森」を訪れてみる。ここは、美術館とコンベンション施設・研修施設を備えた公園だ。駐車場から遊歩道に沿って、広大な園内を散歩する。園内の至る所に陶芸作品が展示されているのも面白い。美術館を覗いたり、ショップで土産物を物色したり、気の向くままに見て回ったところで、のどが渇いた。

近くの「奥田忠左衛門窯 信楽陶芸村」には、33年前まで実際に使われていた本物の登り窯をリノベーションしたカフェがある。朝ドラ『スカーレット』の主人公・川原貴美子を演じた戸田恵梨香さんも訪れた場所だ。炎によって生み出された「スカーレット」（焼成により赤褐色になった内壁の色）が間近で見られるとは。約56年にわたって炎が描き出した幻想的な色合いは本当に見事で、スカーレットに包まれながらのティータイムは贅沢なひとときとなった。

『源氏物語』の舞台である京滋を訪ねた2日間は、たゆまぬ努力によって先人が受け継いできた文化と歴史を知る旅だった。

▲ 滋賀県立陶芸の森
広大な敷地内には、陶芸専門美術館「陶芸館」、ショップ＆ギャラリー「信楽産業展示館」、「創作研修館」や「広場」があり、やきものを存分に体感できる。

▼ のぼり窯カフェ
昭和９年に築窯された当時の姿そのままの登り窯をイートインスペースに。平成２年まで現役だった窯の歴史を、今に伝える。

京都・滋賀
受け継がれる 文化と歴史にふれる
旅MAP